

真夜中の恋愛レッスン

プロローグ やつと恋愛解禁！ と思いきや

『すごい！ 爪がツヤツヤ！ ピンク色だあ！』

初めてマニキュアを自分の爪に塗ったときのあの感動は、今でも忘れられない。

あれは、私、むら村瀬美乃里のりが小学校一年生の頃――

親戚の家で、従姉いしこのお姉さんがマニキュアを塗っていたのを見て、自分もやって欲しいと強請ねだったのがきっかけだ。

薄ピンク色に染まった自分の小さな爪を、目を輝かせながら眺めていた。そんな私のことを、親戚は『小さくてもオシャレに興味があるんだね』と笑っていたのを覚えている。

それ以来、私はネイルアートの虜とりことなった。

お小遣いを貯めてマニキュアを買い込み、土日や長期休暇には必ずネイルをして楽しむ日々。

ご飯を食べるとき、ドアを開けると――日常のちょっとした瞬間にキレイに色付いた爪を見ると、心がウキウキ弾んだ。

中学生になってネイリストという職業があることを知った衝撃は今でも忘れない。それと同時に、自分もネイリストになりたいと夢見るようになった。

高校卒業後はネイルの専門学校に進学。ネイリストのアシスタントとしてアルバイトをしながら通い、そのネイルサロンにネイリストとして就職した。

たくさんのお客様に満足して欲しい。

もっと技術を磨いて、すごいネイルアートができるになりたい。

サロンで一番指名をもらえるネイリストになりたい。

自分のサロンを持ちたい。

ネイリストになるという夢を叶えた後も、私の夢は広がり続けた。

仕事を通して自分の実力不足を痛感し、悔しい思いをしたこともある。でもそれを乗り越えたときの快感はなににも代えられない。

頑張って一つずつ夢を叶えていくのって、なんて楽しいんだろう。

そうしてひたすら夢を追い続けた私は、二十七歳にしてとうとう自分のサロンを持つことができたのだ。

駅から歩いて五分ほど。十四階建てマンションの十二階にあるワンルームを借り、『ネイルサロン・MINORI』を開業した。桜の花びらが舞い散る春のことだった。

開業してすぐはなかなかお客さんが定着せず、『来年、桜を見るのは、ネイルサロン経営者として出勤するときじゃなくて、無職になって就職活動に向かうときかも……』なんてネガティブなこ

とばかり考えていた。

でもあれから一年——私は自分のサロンへ出勤するために同じ道を歩き、また桜を見ることができている。

苦勞したけれど固定客もつき、売り上げもようやく安定。廃業の心配は今のところない。

このサロンをできるだけ長く続けていきたい！ というのが、今の目標の一つだ。

そんなある日のサロンでのこと。

「美乃里さん、聞いて下さいよぉー！ 先月から付き合い始めたアタシの新しい彼氏、全然記念日とか覚えてくれなくてえっ！ この前アタシの誕生日だったんですけど、おめでとうの一言もないんですよ！」

施術中に愚痴をこぼしているのは、開店時から来て下さっているお客様、佐久間様だ。

「えーっ！ それは残念ですね。初めて二人で迎える誕生日だし、ささやかでもいいからお祝いしてほしいところですよね」

「ですよね！ 美乃里さんのカレはどうですか？ イベントとか大切にしてくれます？」

「えーっと、い、今はいないんですよ……」

急に自分の恋バナを求められ、口元が一瞬引きつる。

私は施術するとき、粉じんを吸い込まないようにマスクをしているのだけど、今ほどそれをよかつたと思ったことはない。

「じゃあ、元カレとかどうでした？」

「……えー……つと、やつぱり、そういうタイプの人もいましたね。でも、上手くやっていくには、どちらかが妥協^{だきよう}しないといけないかなーって」

会話をしながら、前回佐久間様に施^{ほどこ}したネイルを落としていく。

「あー……なるほど。そっかあ……うん、妥協^{だきよう}も必要ですよ。んー……よし、今回のところは許してやるかなっ！」

「ふふ、そこで『どうして自分が妥協^{だきよう}しなくちゃいけないの?』って不満が出てこないのは、佐久間様が彼氏さんのことを本当に好きな証拠ですよ」

そう言うと、佐久間様の頬が少し赤くなった。

「……そっかあ、アタシ、自分で思ってたよりアイツのこと好きなんだ」

「はい、きつとそうですよ。彼氏さんのことを話すときの佐久間様、怒っていてもとっても幸せそうですもん」

「えっ！ 本当に？ もお、やだあ……美乃里さんと話すと、いつも自分でも知らなかったことに気付いちやうなあ……一か月に一回、爪も心もピカピカになるって感じ！」

「わあ、本当ですか？ 嬉しいです。ありがとうございます！」

「あ、言っておきますけど、お世辞^{せじ}じゃないですよ？ マジです！ 美乃里さんは経験豊富そうだし、ネイリストだけに留まらず、恋愛カウンセラーとかもいけちゃうんじゃない？」

「いえいえ、そんなことないですよ」

ああ、またマスクの下の口元が引きつってしまう。佐久間様はそんな私の様子には気付かず恋バ

ナを続け、施術^{せじゆつ}が終わると上機嫌で帰っていった。



誰もいなくなった店内で、ため息を吐く。

恋愛経験豊富だなんて、本当にそんなことない。

——なぜなら私には、彼氏がいたことなんて一度もないのだから……

佐久間様へのアドバイスも、他のお客様にしてきたアドバイスも、友人からの受け売りだ。しかし、そうしてお客様の相談に乗っているうちに、「恋愛経験豊富なネイリスト」という評判がついてしまった。

自分の人生をどんなにさかのぼってみても、恋愛経験と言えそうなものはない。

中学生のときには好きな人がいた。でもそれは恋に恋をしている感じで、今日は一言話せた！とか、挨拶^{あいさつ}できた！とか、同じ班になれた！とか、そんな些細^{ささい}なことで一喜一憂^{いちいう}していただけたもの。

高校生になってからは、中学時代よりもさらに恋愛には縁遠くなった。

ネイル用品を買うためのバイトに明け暮れていたし、同性の友達と遊ぶほうが楽しかったから。男子と話した記憶と言え……隣の席の子が『やべ、教科書忘れた。村瀬、見せてくんねえ?』と尋ねてきたのに対し『うん、いいよ』と答えた……それくらい? その男子が誰だったのか、名

前どころか顔すらも思い出せない。

別に恋愛を避けていたわけじゃないし、機会があればしてみたいと思ってはいたけれど、ネイルより夢中になれるような出会いはなかった。さらには高校を卒業する頃に起きたとあることが原因で男性とは一線を引くように。

あれは高校三年生の、二月なかばの金曜日のことだ。確かバレンタインが終わったあたりだったはず。

通勤や通学する人で電車が混雑する朝。その日はいつも一緒に登校していた友達がインフルエンザで休みだったため、一人で電車に乗った。

学校までは五駅。友達と一緒にあらあつという間なのに、一人だと退屈でやけに長く感じるなあと思っていたら、お尻を触られたのだ。

初めはコツコツとなにかが偶然当たったような感じだったから、『あれ？ カバンでも当たってるのかな？』と思っていた。

そのときまで一度も痴漢に遭ったことはなかったし、自分が遭うはずなんてないという、根拠のない自信を持っていた。

それでも気になって恐る恐る振り向いたところ、そこに立っていたのは中年男性。その人は私と目が合った途端、ジロリと睨んできた。鋭い視線に、背筋がゾクツとしたのを今でも覚えている。

思わず目を逸らして前を向き直すと、またなにかがコツコツお尻に当てられ……

『……』

早く駅について欲しいと願いながら不快な感触に耐えていたのだけれど、次の瞬間、お尻を思いきり鷲掴みにされた。

今思えば、偶然手が当たったふうを装い、私がどう反応するかを見ていたのだろう。

私が睨み返したり、手を払ったりしていれば、行為には及ばなかったのかもしれない。

でも当時の私は怖くて声も出せなかった。

さらに悪かったのは、近くにいた人たちが助けてくれなかったことだ。

左隣に立っていた若いサラリーマンは、涙目になっていた私に気付き、痴漢の手元を見てギョツとした。

しかし彼はバツと目を逸らし、気付かないふりをしたのだ。

右隣に立っていたOLも、ちらちらとこちらをうかがっていたけれど、私と目が合うとフイツと別の方向を向いた。あのときは『どうして気付かないふりをするの!?』と思っていた。でも、大人になった今ならわかる。きつと面倒事に巻き込まれるのが嫌だったのだろう。

ついに涙がこぼれそうになったそのとき、誰かが私と痴漢との間に無理矢理入り込み、お尻から手が離れた。

『おい、やめろよ』

振り向くと、茶髪の男性のうしろ姿が見えた。

『や、やめるって、なんのことかね?』

『しらばっくれるなよ。見てたんだからな』

彼はシルバーの指輪がたくさん付いた手で、私のお尻を触っていた痴漢の手を掴む。
助かった……

恐怖から解放された安堵で、私の目に溜まっていた涙がポロッとこぼれた。
『し、知らないって言ってるだろ！』

痴漢は電車が駅に着いた瞬間、思いきり茶髪の男性の手を振り払い、人にぶつかりながら全速力で降りて行った。

『待て、コラッ！』

茶髪の男性がすぐさま追いかけてくれようとしたけれど、私は咄嗟に彼のジャケットを掴んで止めた。

捕まえたら、またあの男に会わなくちゃいけない。怖い。もう二度と会いたくない。そんな思いからだった。

『だ、大丈夫、です！ 追いかけないで、大丈夫ですっ……！』
ようやく出た声は、自分でも驚くぐらい小さく、震えていた。

『本当に、大丈夫……です……っ』

ちゃんと聞かえたかな？ と不安になって、もう一度言うが、どう頑張ってもはつきり話せない。周りの人の視線がこちらに集中している。

それに気付き、私は恥ずかしくて縮こまった。すると、助けてくれた男性が私の手首をそっと引いて電車から降りた。

『へ？ あ、あの……』

ホームのベンチに腰かけるよう勧められ、ようやく自分の足がガクガク震えていることに気付く。気付いた途端、ますます震えはひどくなった。

『ちょっと休んだほうがいいよ。ね？』

『は、はい……』

私が腰を下ろすのを見届けた男性は、少し離れた場所にある自動販売機に向かって歩いて行った。極度の緊張状態から解放された私は、その姿をぼんやり眺める。ほどなくして戻ってきた彼は、『怖い思いをした上に、あんなふうに注目されたら辛いよな。俺の配慮が足りなかった。ごめん』と私に頭を下げた。

『い、いえ、そんなっ』

私が慌てていると、男性は買ってきたジュースをハンカチで包んで、私に差し出した。

『寒いかもしれないけど、そのままだと腫れちゃうからこれを目に当てておきな』

『えっ！ でも……』

『いいから、いいから。ほら、はい』

男性は私にジュースを持たせ、隣に腰を下ろす。

泣いて熱くなった瞼の上に、もらったジュースを当てると、ひんやりして気持ちがいい。

『キミ、学校はどこ？ その制服は……松並高かな？』

『あ、はい、そうです』

そうだ。学校、遅刻しちゃう……！

今日は卒業式のリハーサルの日なのだ。同学年が一堂に会するから、遅刻なんてすればすぐ目立ってしまう。

それに担任は男性だ。女性教諭ならまだしも、男性教諭に『痴漢に遭ったから遅刻しました』……だなんて言いたくない。

『そう、じゃあ余裕かな？ 行こうか』

『え？ え？ あの……』

私は男性に手を引かれ、改札を出た。

事態をよく呑み込めずに導かれるまま足を進めると、彼は私をタクシー乗り場まで連れて行き、停まっていたタクシーに乗るように促した。

『へ？ あの、どうして……』

『すみません。この子を松並高校までお願いします』

男性は運転手さんに行き先を告げ、『おつりはこの子にあげて下さい』と言って、先にお金を払ってくれた。

『えっ！ あの、そんな、私……っ』

『今日はもう電車に乗るの、嫌だろ？』

『そ、それは……』

『ほら、遅れるから早く乗っちゃいな』

背中を押されて、私は戸惑いながらもタクシーに乗り込んだ。

『あの、せめてタクシー代は自分で……』

『いいから、いいから。……あのさ、男はあんなヤツばかりじゃないから。最低なヤツもいるけど、トラウマにしないでな。ちゃんとしたヤツもいるからさ』

男性はそう言って私の頭をポンと撫でると、来た道を戻って行った。

お礼を言えていないことに気付いたのは、タクシーが発車した後——しかもハンカチを借りたままだ。

また同じ沿線の電車に乗っていたら、いつか会えるかな……もしかしたら、月曜日にまた会えるかも!?

そんな期待をしていたのだけど、日曜日から高熱を出した私は、病院でインフルエンザだと診断され、外出禁止となった。完治してから卒業式まで登校日はなく、高校卒業後はその沿線に乗る機会もなくなり、彼と再会することはなかった。

涙のせいで顔がほとんど見えなかったから、会えたとしても気付けないかもしれない。せめてお礼を言いたかったな……

そんなことがあつて以来、男の人が少し……ううん、かなり苦手になった。

助けてくれたお兄さんは『男はあんなヤツばかりじゃない』って言っていたし、あの人と言うのならそうなんだろうと思う。でも、男性を見るたびに、痴漢されたときの嫌な気持ち^{よみがえ}が蘇って、恋愛をする気になれなかった。

専門学校時代は学校の勉強とバイトの両立で、恋愛をする余裕なんてなかったし、就職してから目標を達成することに必死だったから、『恋愛は夢が叶ってからすればいいや』『もっと年を取れば男の人が苦手じゃなくなるかも』なんて樂觀的なことを考えていた。

そして自分のサロンを開いて、二年目に突入することができた今、ようやく恋愛にも目を向けていこうと思いだめたのだけど――

そう上手くはいかないもので、またもや恋愛から距離を置きたくなるような出来事に遭遇してしまった。あれはスプリングコートがいらないほど暖かった春のこと。高校の頃からの友達である尚子と呑みに行ったときの話だ。

呑んでいる最中に、尚子のスマホが鳴った。彼女がつい最近付き合い始めたという彼氏からの着信だった。

彼はたまたま近くに用事があつたらしく、私たちと合流して一緒に呑むことになったのだけど……

『初めましてー！ 笹原拓也です。よろしくー』

彼は一般企業で営業をしているらしい。見た目は爽やかで話し方も明るく、優しそうで、とても好印象だった。

尚子、いい人と付き合えてよかったなあ……

友達の恋人つてこともあるだろうけれど、彼を見ても痴漢をされたときの嫌な気持ちを思い出しはしない。

大人になっても、男の人に対しての苦手意識は消えなかった。でも薄れてきてはいるようで、優しそうな男性になら、昔ほど嫌悪感は抱かない。

『初めまして、村瀬美乃里です。よろしくお願いします』

尚子の彼が合流する前に、そろそろ恋愛にも目を向けたいという話をしていた。そこで気を利かせた尚子が、お酒が回ってきた頃に『誰か紹介してあげて欲しい』と彼氏に言ってくれた。

『美乃里ちゃんは可愛いし、結構遊んできたんじゃない？ 紹介なんてしなくても、引く手数多つて印象だけど、そこんどこどうっ!?』

『えっ……!』

私が戸惑っていると、尚子が彼を睨む。

『ちよっと、変な言い方しないでよ』

『ええー？ 全然変じゃないよ。ね？ 美乃里ちゃん』

『い、いやーあのー……!』

な、なんて答えればいいの……っ！

尚子の彼氏はかなりお酒が弱いらしく、一杯呑んだだけでベロンベロンになっていた。

『拓也、そういうのはプライバシーの問題だから、深く突っ込まないでよ』

ああ、尚子が気を遣ってくれてるのがヒシヒシ伝わってくる。すると尚子の彼氏はジョッキの中心に残っていたビールを一気に呷り、ニヤリと笑う。

『えーっ！ なになに？ そういう言い方するってことは、美乃里ちゃんつてやつぱり遊んでる

の?』

『拓也、いい加減にして!』

尚子が少し声を荒らげる。

『るっせーな! さつきからなんなんだよ! お前に聞いてねーし!』

『はあ!? なに、その言い方!』

ああ、私のせいで険悪な雰囲気になってしまった。

『え、えっと、いないんです』

一度も彼氏ができたことがないとバレるのは恥ずかしくて、普段はよほど親しい友達以外には言わないでいる。特に恋愛経験豊富なネイリストのいる店という噂が広まった今、それが嘘だとバレるのはお店の評判に関わるので、隠すことが多くなった。

でも、今まで誰とも付き合ったことがないのは悪いことじゃないし、尚子と彼の仲を険悪にしてまで隠し通そうとは思わない。

『いない? って、え? どういうこと?』

『そのままの意味です。彼氏がいたことないんです』

そう答えると、彼は苦笑いしながら『うわー……』と呟く。明らかに引いてる。引いてるところかドン引きだ。

『今まで彼氏いたことなかったの!? いや、それはヤバいっしょ!』

『ヤバいって、どういう意味でのヤバい……ですか?』

『言葉通りの意味だよ! 尚子と同年つてことは、二十八歳だよな? その歳で一人も付き合ったことないとか、なにか問題があると思えないんだけど』

尚子が『ちよっと、いい加減にして!』と声を荒らげるけれど、彼はそのまま言葉を続けた。

『ほら、果物売り場で苺がいっぱい売ってるとするじゃん?』

『は、はあ……』

なんで突然、苺の話……!?

よくわからないけれど、黙って話を聞くことにする。

『んで、みんなよく見て買っていくわけよ。一見キレイでよさげに見えても、側面が少し潰れたり、腐ったりしてる部分がわかるっしょ?』

『そうですね……』

苺と私の恋愛歴、どう関係あるの?

『ちよっと、拓也。いい加減にしてって言ってるでしょ!』

『るせーな。黙っとけよ! で、よく見られた結果、新鮮で美味そうなヤツから選ばれていって、傷んだ苺は買ってもらえない。つまり美乃里ちゃんもそういうことじゃないの?』

『えっ……』

『はっと見は可愛いけど、よく見たらそういう欠点があるんじゃないかっていうこと。だっておかしいじゃん。その歳で一度も付き合ったことないなんてさ。うん、おかしい! おかしい、おかしい!』

大事なことから二度言いましたどころか、三度も四度も言われた。

『いい加減にしてよ！ 美乃里は今まで仕事一筋で彼氏を作ってこなかっただけなの！ 欠点があるわけじゃないんだよ！』

『お前って友達を大事にするよな。でも、こういうことは、親しい人間がハッキリ言っただけだよ。本人、気付けないわけよ。わかる？』

『なんで私が気を遣ってお世辞言ってるみたいな流れになるわけ!? 本当に美乃里はそういうんじゃないって……っ』

尚子が彼を叱り付けている間、私はショックで呆然としていた。

二十八歳になるまで彼氏が一人もいたことがない人を見ると、そんなふうに思うものの？

『あーはいはい、お前がそう思っただけのことだよ。でも、男はみんな引くから！ 現に俺も引いたし。そんな子、彼女にしたいくないもん』

そうなの!? そんなヤバイレベルなの!?

この先もし好きな人ができたとしても、そう思われるってこと……!?

『それはあなたの考え方ですよ!? あんたがそんな最低な男だと思わなかった！ 酒癖はよくないと思っただけで、私の友達にこんな酷いこと言うなんて許せない!』

『はあ？ 俺は酒癖悪くねーよ！ 正直に言っただけだよ!』

『ふざけんな!』

二人の言い争いを仲裁しようとするものの、ショックのあまりろくな言葉が出てこない。

友達の彼氏に言われてもこんなに辛いんだから、もし好きな人に面と向かって言われたら……? うわ、一生立ち直れないかも……

とか好きな人から拒絶された場合、みんなどうやって立ち直ってるの? 想像するだけでも胸が痛いのに……

尚子は彼氏を無理矢理帰し、まったく悪くないのに私に頭を下げてくれた。

『美乃里、本当にごめんね！ 酔って調子に乗っただけだし、あれはあいつの価値観だけで、他の男の人は絶対違うから……!』

『うん、ありがとう。それよりも私のせいで喧嘩させちゃってごめんね』

『いや、あれは拓也が全面的に悪いんだし！ 美乃里が気にすることなんて一つもないよ！ あいつ、マジ許せない!』

尚子はそう言うけれど、いつか好きになる人が拓也さんと同じ考えだってこともありうる。怖い——

そう思うと同時に、薄れていた恐怖も蘇ってきた。

男の人が、怖い——

あんなにいい人そうに見えた拓也さんも、話してみると全然違った。男の人がなにを考えているのかまったくわからない。得体が知れなくて怖い。男性のなにもかもが怖い。

私の沈んだ様子を心配したのか、尚子が申し訳なさそうにこちらを見ている。

『美乃里、今日は嫌な思いさせて本当にごめんね……』

『いやいや、大丈夫だから謝らないで!』

『あいつにはもう頼まない! 他の友達に誰か紹介してもらえないか頼んでみるよ。美乃里、どういう人がいい?』

『えっと……うん、ありがとうっ! でも紹介って身構えちゃいそうだから、自然に出会えるように色々出かけてみようかなって思う』

『そう? でも、もし紹介して欲しくなったらいつでも言ってね。合コンとかも企画するし! 美乃里は可愛いし、性格いいんだから、彼氏を作ろうと思えばすぐできるよ!』

『うん、ありがとう!』

あのときは、『誰かと付き合おうとするのはやめておく……』なんて言ったら、尚子が気にしてしまうから、当たり障りなく断った。だけど私は傷付きたくないという気持ちが強く、それ以降ますます恋愛から遠ざかっていった。

お客様から恋愛相談をされるとちょっと困るけれど、友達から聞いた話でなんとか切り抜かれる。

今までも、恋愛しなくて大丈夫だったんだもん。傷付くぐらいなら、今まで通り一人でいいや……。結婚に対する憧れは人並みにあるけれど、拓也さんの一件以来男性不信に逆戻りしてしまったし、一生一人で生きていこう。そう思うようになった。

でも、時々ふと思いつく。

『……あのさ、男はあんなヤツばかりじゃないから。最低なヤツもいるけど、トラウマにしないで

な。ちゃんとしたヤツもいるからさ』

私を痴漢から助けてくれたあの人のこと――

あの人のだけは、もう一度会いたい。

今でも電車に乗るたび、あの人の姿を探している。

あの人は今、どこで、なにをしているんだろう……

第一章 カッコいいお姉さん(!?)は好きですか?

二十三時――仕事を終えた私は寄り道せずに帰宅し、着替えもしないでノートパソコンに向かった。

実家なら『着替えてからにしない!』と母に一喝されそうだけど、社会人になってからは一人暮らししているので問題ない。とにかく早くやりたいことがあった。情報を仕入れてから、ずっと心待ちにしてきたことである。

お店から電車で四駅的位置にある五階建て賃貸マンション。その三階の角部屋が私の家だ。駅から歩いて十五分。少し距離はあるけれど、近所にはコンビニやスーパーもいくつかあり、住みやすいので気に入っている。

オートロックでカメラ付きドアインターフォンもあるから、セキュリティ面もバッチリ! ワン

ルームでちょっと狭いけど、一日のほとんどはお店で過ごすから気にならない。

「よし、予約完了……っと！ はああああ……！」

インターネットの入力フォームから、とあるサービスの申し込み手続きを済ませた私は、達成感のあまり大きなため息を吐いた。

恋愛はしないと決めたものの、私はどうしてもしてみたいことがあった。それはウエディングドレスを着ることだ。

お姫様みたいな純白のドレスに、とびきり凝ったヘアメイク、ドレスに合わせた白いウエディングネイル……ああ……！　すごく憧れる！

お客様からウエディングネイルを希望されるたびに、羨ましくて堪らなかった。けれどいくら夢見ても、相手がいなければ叶わないわけで――

そもそも私は贅沢なのだ。

夢を持ったって、全部叶うわけがない。

こうして自分の好きな職業に就けて、続けられていること自体、奇跡みたいなのに……

そう思ってウエディングドレスを着るのは諦めようとしていた、ある休みの日のこと。お菓子を食べながらぼんやりとテレビを見ていたら、衝撃の特集が流れた。

進行役のアナウンサーとモデルの女の子が会話している。

『みなさんは“ソロウエディング”というものをご存知でしょうか？』

『なんですかそれは？』

『結婚の予定はないけれど、ウエディングドレスが着たい！　そんな女性たちが、今急増しているとか。そうしてできた究極のおひとりさまサービスが“ソロウエディング”！　お相手がいないても、ウエディングドレスを着て撮影ができるんです！』

『ええっ!?　おひとりさまもそこまでいくんですか!?』

サービスは、ウエディングドレスを着て撮影をするという簡単なものから、一人だけで結婚式を挙げられるプランまであって、一番安いものでなんと二万円から！

これだ！

私はすぐにスマホで検索をかけ、ソロウエディングを行っている会社を探した。

欲を言えば、もちろん誰かとちゃんと結婚して式を挙げたいけれど、そんなわがままは言わない。ただウエディングドレスを着て写真が撮れたらいいのだ。

でも、ひとつ注意すべきことがあった。もしうちのお店に来てくれるお客様に見られたら、なぜソロウエディングをするのか……という疑問を持たれるだろう。

『恋愛経験豊富なんて誤解なんです！　今まで彼氏ができたこともなかったし、これからその予定はないし、一生結婚するつもりもないんですけど、ウエディングドレスだけでも着てみたかったの！　えへっ！』

なんて正直に言うわけにはいかない。今後の店の経営に関わる……！

なにせ私は、経験豊富そうふりをしてお客様の恋愛相談に乗っているのだ。経験がないと知られたら、不快感を持たれること間違いナシ！　もうお店に来てくれなくなる可能性だってある。自

業自得とはいえ、それだけは避けたい。

『あの店長、恋愛経験ゼロの癖に偉そうにアドバイスしてくるんだよ』なんて噂が広まったら、誰も来てくれなくなつて、最悪廃業……!!?

い、いやあああ……っ!

ああ、最悪な想像をしてしまった。

とにかくお客様に見られるわけにはいかない。

私は吟味に吟味を重ね、ソロウエディングを知ってから一か月後の今日、家やサロンから遠くのお店を選んで、インターネットから予約をした。結構人気の店らしく、予約開始直後に枠が埋まってしまうことがあると聞いていたから急いで帰宅したのだ。予約は今日の二十時スタートだったけど、間に合つてよかった。

ソロウエディングに備えて、ちょっと贅沢かな? って思ったけど初めて全身エステもしたし、美容室で髪を染め直して一番高いトリートメントもしてもらった。後は新幹線の切符を手配して、決めてあるデザイン通り、前の日にネイルをすれば完璧だ。すぐくドキドキするけれど、とても楽しみ!



数日後のソロウエディングを励みにすれば、いつもは苦痛でしかない満員電車も辛くなかった。

上機嫌で通勤電車に乗っていると、私の前に立っているサラリーマンの男性にふと目が行く。中肉中背で、黒髪の中に白髪が交じっている。五十代前半……といったところだろうか。

ん……?

うしろからでもわかるくらい鼻息が荒い上に、右肩が不自然に動いているような……?

男性の前には、背の高い女性が立っていた。

もしかして……

男性の手元が見えるように、身体を少しずらす。

視線で辿って行くと……その手は女性のお尻を撫でていた。彼女はその手から逃れようと、身体をよじらせている。

頭にカアツと血がのぼった。

昔、痴漢に遭ったときの恐怖を思い出す。

あのとき助けてもらえて、本当に嬉しかった……

だから、誰かが痴漢に遭って困っていたら、自分がしてもらったように、見て見ぬふりをせず、勇気を出して助けようと心に誓っていた。

あれから十年——ついにかのときがきたのだ。

意を決して女性のお尻を触る男性の手首を掴み、ギロリと睨み付ける。

「ちよつと、あなた!」

「なっ……なんだ、あんたは!」

「どうしてこうされるのか、自分が一番ご存知ですよ？ 私、あなたが彼女になにをしていたのか、この目でしっかり見ていましたよ」

男性の顔が見るうちに真っ赤になり、さつきとは違う理由で鼻息が荒くなっていく。

「俺は知らんっ！ 離してくれ！ 迷惑だ！」

「身に覚えがないのなら、駅員の前でご自分の無実を訴えて下さい。次の駅で降りましょう」

「……わかった。わかったから、手を離してくれ。俺は腱鞘炎なんだ。そんなに強く握られていると痛む……あー痛たたたっ……！ 手が使えなくなってしまう……っ」

さつきまではその手、絶好調のようでしたけど……！

と突っ込もうとしたとき、電車が次の駅に到着してドアが開く。その瞬間、男性は渾身の力で私の手を振り払い、持っていたコンビニのレジ袋を私の顔目がけて投げつけてきた。

「きやつ……！」

「チッ！ 恥かかせやがって！ 正義の味方気取りかよ！ このブス！」

そんな台詞と共に肩を押され、バランスを崩した私は背中から転びそうになり——周囲の動きがスローモーションに見えた。

や、ば……っ！

ああ、最悪だ。すっかり油断していた。

咄嗟に手を突きそうになっただけ、すぐに引っ込める。

転んだとしても、仕事のために、手だけは守らなくちゃ……！

すると、誰かにしっかりと身体を支えられ、転倒せずにすんだ。

「くそ……っ！」

男性は悔しげに顔を歪ませ、すぐに逃げて人の波に隠れてしまった。

「ナイスファイト。助けてくれて、ありがとうね。でも、危ないわよ？」

え……？

振り向くと、さつき痴漢に遭っていたお姉さんが、ニッコリ微笑んでこっちを見ていた。どうやら彼女が私を受け止めてくれたらしい。

うっわ……！！ すごい美人……！

背中まであるキレイな茶髪、切れ長の目、スツと通った鼻筋。こんな美人見たことない。

モデルさんかな？ かなり身長が高い。ヒールを脱いでも百八十センチはありそうだ。

シンプルなカットソーの上に薄手のカーディガンを羽織り、首元をセンスのいいスカーフで彩っている。足が長いから、白のパンツ姿がすごく決まってる。

「あ、ありがとうございます。すみません。逃げられちゃって……」

「ああ、そんなことはどうでもいいのよ。それよりもあなたに怪我がなくてよかった。えーっと、この駅で降りるのかしら？」

結構ハスキーな声だ。

男性からもモテそうだけど、女性からもモテそうだなあ……

「いえ、あと二駅です」

「わたしはあと四駅だから、まだお話できそうね。助けてくれて本当にありがとう。あのクソ野郎！ 人のお尻をパン生地のようにこねくり回しやがって、気持ち悪いっただけやしなかったわ」

「私こそ助けてもらっちゃってすみません。危うく転んじゃうところでした！」

「本当よ！ あなたが怪我するとこだったわ。もう、あの痴漢男！ 今度見かけたら金蹴りでもしてやろうかしらっ！」

豪快な美人だ。

緊張が解けて私が口元を綻ばせると、お姉さんも笑ってくれた。

「昨日、テレビでドキュメンタリー番組なんて見ちゃったのがいけなかったわ……」

「ドキュメンタリーですか？」

どうしてそれがいけないのだろう。

キョトンとしていると、お姉さんがふうつとため息を吐く。薄ピンク色の口紅で彩られた唇がとつとも艶っぽい。

「痴漢冤罪で家庭崩壊したって話だったのよ。その人の子供、まだ小っちゃくてねえ……わたし、お酒も入ってたからちよつとホロリと来ちゃったわ。わたしのお尻を掴んだ男は冤罪じゃないけど、ヤツにも家庭があったとしたら……って色々想像して情けが生まれちゃってね。それなら『二度と痴漢なんてしない！』って思わせてやろうかと密かに考えてたのよ」

「どんなことですか？」

「んーそうねえ……わたしのお尻を撫で回していた指を一、二本ポッキリ折ってやるとか……かしらね？」

「ポッキリ!? 随分バイオレンスですねっ！」

「だってえ、改心する時間は十分与えたのよ? お尻をこう動かして、嫌がつてゐるってことを伝えただけで、余計ヒートアップしやがって! 腹立つわあ……!」

お姉さんがお尻を動かしながらプリプリ怒るものだから、思わず笑ってしまう。

「す、すみません。笑いごとじゃないのに……」

「あら、いいのよ。女の子は笑顔が一番だものっ」

痴漢に遭ったばかりだというのに、お姉さんはすごく明るい。

無理しているのかな……?

しかし表情から察するに、そうでもない様子だ。

「それよりあなた、痴漢から助けようとしてくれるなんて、勇気があるのねえ」

「私も昔、痴漢に遭ったときに助けてもらったことがあったんですね。高校生のとき、怖くて『やめてください! 助けてください!』って言えなかった私を、その人は助けてくれたんです。今でもあのときのホッとした気持ち、忘れられないです。すごく嬉しかったから、もし痴漢に遭っている人を見つけたら、私も絶対に助けようって決めて……」

でも、今日は結局お姉さんに助けてもらっちゃったし、あの人みたいにはいかなかったなあ……
「まあ、そうだったの」

「助けてくれたのは若い男の人だったんですけど、私、混乱してたからお礼とかも言えなかったんですよね。泣いて腫れた目を冷やすために缶ジュースを買ってきてくれたり、その日は電車に乗りたくていいようにタクシーに乗せてくれたり、すぐく親切にもらったのに……」

お姉さんは目を丸くし、私をまじまじと眺めてくる。

「あらあらあら……?」

「え? な、なんですか?」

私、変なこと言った?

不安になっていると、お姉さんが微笑んだ。

「あ、いえ、なんでもないの。そう、そうだったのね」

んんん?

首を傾げていたところ、お姉さんがまたニコツと笑う。

「……つと、次が降りる駅よね? 今日は助けてくれて本当にありがとう。ぜひ、今度お礼がしたいんだけど……」

「あつ! いえ、そんなこと気にしないで下さいっ! つていうか結局助けられてないですし……」

「ううん、そんなのダメ。ね、お願い。お礼させて?」

確かに私も、助けてくれたあのお兄さんに、今でもお礼がしたいと思ってる。だからお姉さんの厚意を受け取ることにした。

「えーつと……あつ! じゃあ、お店に来てくれませんか?」

「お店?」

「私、次の駅近くのマンションでネイルサロンをやってるんですけど、よかったら来て下さい。あと、お友達に紹介とかもしていただけたら、もつと喜んじゃいますっ!」

カバンから名刺を取り出し、お姉さんに渡す。

「あら、ネイリストさんだったのね! どうりでキレイな爪だと思ったわ。ありがとう。必ず行くわね。村瀬美乃里さんね、わたしは青山蓮あやまれんっていうの」

「はい、お待ちしておりますっ!」

青山蓮さんかあ……

素敵な名前だ。名前からして、美人なオーラが出ている気がする。

青山さんと別れ、私は「本当に来てくれたらいいな」と考えながら、店へと向かった。



ついに! ついにこの日が来たー!

「村瀬様、お待ちしております。どうぞこちらへ。ドレスを選んでいただいてから、ヘアメイクに入りますね」

「は、はいっ!」

サロンが休みの水曜日。私は新幹線を使い、ソロウエディングの予約をしていた写真館を訪れた。

ここでは、結婚式の前撮りや、式を挙げないカップルがドレスや和装で記念写真を撮るフォトウエディングおこなを行っている。

ウエディングらしく白を基調とした内装で、広々としたスタジオだ。至る所に鏡があるので、実際よりも奥行きがあるように錯覚さくかくする。案内された部屋には、ウエディングドレスがずらっと並んでいた。

「うわ……すごい。みんな、キレイ……」

「若いお客様ですと、カラードレスが人気ですね。こういった花柄やボーダー柄も評判がいいんですよ」

女性スタッフがドレスを見せながら丁寧に説明してくれて、話しているうちにだんだん緊張が解ほぐれてきた。

カラフルなドレスを見てみると、心が躍おどる。

でもやっぱり私は、憧れあこがだった白のウエディングドレスが着たい。

私が手に取ったのは、フリルやレースがたっぷり使われたプリンセスラインの白いドレスだ。

私のウエディングドレスのイメージが、そっくりそのまま現実になったようなデザインで、一目見てコレ！と決められた。

ドレスを試着すると、背筋が伸びる。

結婚式で見かける花嫁さんってみんな幸せそうに笑ってるけど、ドレスって結構色んなところが締め付けられて苦しい……！

一度ドレスを脱いでアクセサリーやブーケを選んだ後、メイクルームへ案内された。

ドレスの展示場を出てすぐ隣が、メイクルームだ。ふたたびドレスを身に着け、椅子いすに腰かけると、選んだドレスの写真が鏡にペタリと貼られる。

ドレスを着ていてもケープで隠れてしまっているから、メイクさんはこれを参考にしてヘアメイクをするのだろう。

「すぐに担当の者が参りますので、少々お待ち下さい。こちら、ヘアカタログになります」

「あ、ありがとうございます」

差し出されたカタログを開いてみるものの、たくさん種類があって悩んでしまう。

アップスタイル？ でも顔が大きく見えちゃうかな？ どうせなら小顔に写りたいし、それなら髪を下ろすべき？ でもせっかくプロにやってもらえるんだから、普段自分じゃ絶対できないヘアスタイルにしてもらったほうがお得な気も……

夢中になって考えていると、扉をノックする音が聞こえた。

「は、はい」

「失礼します。本日ヘアメイクを担当させていただきます……あら？」

「えっ！」

扉を開けて入ってきたのは、なんとこの間電車で出会った青山さんだった。

えええええ！ ヤ、ヤバい！ どうしよう！

新幹線を使ってまで遠い場所を選んだのに、まさかスタッフが知人だなんて……！

しかも、彼女には自分の素性を明かす名刺まで渡してしまった。

青山さんから他のお客さんに噂が伝わって、やがて閉店に……なんてことになったらどうしよう。ほんの一瞬で最悪な想像が浮かんた。

「お名前が一緒だとは思ったけど、まさか本人だとは思わなかったわ！　こんな所で会えるなんてビックリよ！　この前はどうもありがとうねっ！」

「は、はははいっ……！」

「あら？　なんだか顔色が悪いわね。具合悪くなっちゃった？」

「い、いえ、大丈夫です」

後悔したところで、もう遅い。

腹をくくるしかない……

「ふんふん、このドレスを選んだのね。可愛い美乃里ちゃんにピッタリのデザインだわ。どんな髪型にしたいとかっていうイメージはある？　カタログで参考になりそうなものはあったかしら」

「なんか見れば見るほどアレもいい、コレもいって悩んじゃって……」

「ふふ、わかるわ。たくさんあると目移りしちゃうわよね」

「アップもいいけど、下ろしたのもいいなあって……」

髪型はドレスに合わせて決めようと思っていたけど、ちゃんと前もって候補を考えてくればよかったかな……

「じゃあハーフアップはどう？　アップと下ろしたところのいいとこどりっ！」

青山さんは実際に私の髪を弄^もって、ヘアクリップで簡単に留めながら説明してくれる。

青山さんの手って大きくて、指が長くてキレイだなあ……

「あ、それがいいです！」

「このドレスと髪型なら花冠^{はなかんむり}かティアラが似合うと思うの。どうかしら？　花冠^{はなかんむり}は造花^{ぞうか}になっちゃうんだけど、写真では意外とわからないもののなのよ」

「花冠^{はなかんむり}！　可愛い^{かわい}です。でも私に似合いますかね……」

「あら、美乃里ちゃんは可愛い^{かわい}もの。絶対に似合うわっ！」

こんな美人にお世辞^{せじ}でも可愛い^{かわい}と言われると、なんだか気恥ずかしくて顔が熱くなる。

「じゃあ、早速始めていくわね。美乃里ちゃんは色が白いから、ファンデは一番明るい色ね。チークはほんのり色付く程度のピンクにして……うんうん、イメージ固まってきたわっ！　絶対ステキにするから楽しみにしててちょうだい」

フルメイクしてもらうのって、何年ぶりだろう。成人式以来？　どんな仕上がりになるか、楽しみだなあ。

「そういえば、どうしてソロウエディングをしようと思ったの？」

「あ……」

ついに、この質問がきた——……！

そうだった。ウキウキして頭から抜け落ちそうになってたけど、バレてはいけない人に知られてしまったんだった。

「あ、あの、私がソロウエディングしたことは、どうかご内密に……」

「ええ、もちろん！ お客様の個人情報をお外ごうがいしたりしないわ。安心してちょうだいね」
あつさり了承してもらえて、ホッと胸を撫なで下ろす。

「訳アリかしら？ ……東京とうきょうにもソロウエディングをやってるお店はあるんだもの。こんなに遠いところにある店を選んだってことは、そうよね」

それらしい言い訳を考えたものの、まったく思い付かない。

口外くわいがいしないって約束してもらえたのもあるけれど、口調とか、青山さんの雰囲気きふきのせいか、彼女ならなんでも受け止めてくれそうな気がして、私はポツリポツリと自分のことを話し始めた。

「私、一生結婚しないことに決めたんですよね……」

「あら、どうして？ 過去の恋愛で嫌なことがあったとか？」

「あ、いえ、嫌なこと……というか、そもそも彼氏いたことがないんですよね。ハハ……」

「ふふ、まあ、そんなこと言ってーっ！ お姉さん、誤魔化ごまかされないわよ？」

恥ずかしくて半笑いで言ってしまったせいか、冗談だと思われたらしい。

「冗談ならよかったんですけど、本当なんですよね……」

暗い顔で思わずため息を吐くと、鏡に映る青山さんがハッとした表情になる。

「嘘、やだ、本当なの？ あっ……まさか、この前話してくれた痴漢ちかんが原因で、男性不信になっちゃったとか……」

「あー……実はそのときから苦手になつて……まあ、大人になるにつれて苦手意識は和らいでたの

で、それだけが原因じゃないというか……」

「他にも原因があるってこと？」

「はい、話すときと長くなっちゃうし、ちつとも面白くないんですけど……」

「ぜひ聞きたいわ。美乃里ちゃんがよければ、ぜひぜひ聞かせて？」

いい人だなあ……そして聞き上手だ。

「今までネイリストになるって夢を追いかけることで頭がいっぱいで。恋愛に興味がなかったわけじゃないんですけど、恋愛は夢を叶えた後にゆっくりでいいや……って考えだったんですよね」

「うんうん、そうなのね。そういう考えもあっていいと思うわ」

「自分のお店が持てるようになって、経営も落ち着いて余裕ができて……その頃には男性に対する苦手意識も和らいでました。だから恋愛に対して前向きに考えてたんですけど……」

友達ともだちの彼氏に会って話したことで新たな恐怖が芽生え、男性に対する苦手意識も復活したことを打ち明けると、青山さんの眉間みけんにシワが寄る。

「なにその男、とんでもないわね！ その友達はなんでそんな男と付き合ってるの？ そいつ、よほどのイケメン？」

「イケメン……ではないかな？ 普通でした。そしてこの前別れちゃったみたいです。価値観が合わなくて疲れるって……」

尚子はそう言っていたけれど、本当は私への発言が引き金になっちゃったんじゃないかと、罪悪感で胸がチクチク痛む。

「別れて正解ね。結婚なんてしたら絶対苦勞するタイプよ。次はキツツイ性格の子と付き合って、ケチオンケチオンにされるといわ。腹立つっ！」

まるで自分のことのように怒ってくれるのが嬉しくて、辛い出来事だったはずなのに口元が綻ぶ。友達に言われただけでもショックだったのに、好きな人から拒絶されたら絶対立ち直れない、それならもう最初から諦めよう！　って思っただけで、それで結婚はしないことにしました。でも、やっぱりウエディングドレスは着てみたくて、ソロウエディングに至ったわけです」

青山さんは大きなため息を吐くと、手を止めて鏡越しに私の目をまっすぐに見つめて――

「美乃里ちゃん、それは違うわ。世の中そんな男ばかりじゃないのよ！」

と力強く言ってくれた。

ああ、慰めてくれてるんだ。

「はい、ありがとうございます」

「あら、本気にされてない？　本当なのよ！　引くわけじゃないっ！」

「いえ、それは青山さんが女の人だからそう思ってくれただけで、男の人は……」

「だから、本当にそんなことないのっ！　絶対よっ！　絶対よっ！」

青山さんはそう言い切ると、ふたたび手を動かし始める。

青山さんは美人だし、きつとこれまでもたくさん恋愛経験を積んできたんだろうな。

もしかしたらその人たちの中には、彼氏ナシ歴イコール年齢でも受け入れてくれそうな優しい人がいたのかもしれない。

ちよつと希望が見えてきた気もしたけれど……ダメだ。私がいつか好きになる人が、そんな心の広い人だとは限らない。ドレスを着て幸せだった気持ちが沈み始める。これ以上この話題は続けたなくて、無理矢理話題を変えることにした。

「そういえば青山さんは、このあたりの人なんですか？」

この間は東京に、出張へ来ていたのかな？

「あ、違うの。わたしの活動拠点は東京よ。ここの店長が学生時代からの友達で、人手が足りないって言うからピンチヒッターで来てるの。昨日と今日限定よ」

「そうだったんですか！」

「二日間しかないのに、まさか美乃里ちゃんと再会できるなんて驚いちゃった。偶然ってあるものね」

「はい、本当に。こんなことあるんですね」

……これ以上偶然が続かないでほしい。このスタジオの中に、私のお店へ通うお客様がいないことを祈るばかりだ。

「美乃里ちゃんは撮影が終わったら、観光して帰るの？」

「いえ、すぐ帰ります。明日のお店の営業までに爪もウエディングネイルから通常ネイルに変えたので、それにも時間がかかりますし」

自分自身のネイルをやるときって、利き手じゃないほうも使わないといけないから、お客様に施術する以上に時間がかかってしまうのだ。

「まあ！ 爪もウエディング仕様なのね。さすがネイリストさん！」

「素敵だわあゝ！　こんなに素敵なのに、変えちゃうのもつたないわねえ」

青山さんと話していると、気の合う友達とカフェでお喋り^{しゃべ}してるみたいだ。

「美乃里ちゃん、とっても素敵よ。まるで女神さまみたい！ それに元がいいから、メイクのし甲斐があったわっ！」

いや、私なのだけど、青山さんのヘアメイクで変身した私は、それが自分とは思えないほどキレイだった。

成人式のためにフルメイクしてもらったときも『プロの人にメイクしてもらうと、やっぱり違う！　すごい！』と感動した。でも青山さんのメイクはそれ以上。

厚く塗り重ねたわけじゃないし、肌呼吸もしっかりできている感じがする。

まつ毛もいつも自分でメイクするときの倍以上に長くなっている。

「もしかして、気に入ってもらえなかったかしら？」

「そんなことないです！　あまりにすごすぎてビックリしちゃって！　自分じゃないみたい……すごいつ！　本当にありがとうございます！　魔法みたいです！」

鏡に釘付けになっている私を見て、青山さんが口元を綻ほころばせた。

青山さんは鏡を見ている私のうしろからポンと肩を叩いて、「今スタツプを呼んでくるから」と部屋を出て行った。しばらくすると最初にここへ案内してくれた女性が来た。

「ありがとうございます。青山さんのヘアメイクが本当にすごすぎて……！」

41 真夜中の恋愛レッスン

してうちに来ているんですけど、普段は芸能人のヘアメイクを担当している凄腕すいづてのメイクアップアーティストなので」

「えっ！ そうなんですかつ!?」

まさかそんなすごい人からメイクをしてもらえるなんて、夢にも思わなかった。

その後、無事撮影を終えた私はドレスを脱ぎ、フォトアルバムにしてもらう写真を選んだ。フォトアルバムは後日自宅に郵送してくれるそうだ。

青山さんにもう一度お礼を言いたかったけれど、その日はとてもお客さんが多かったみたいで、彼女に会うことはできずに東京に戻ってきた。



夢のような時間を過ごしてから数日がすぎたある日のこと、私はまたいつもと変わらない日常を過ごしていた。

その日最初のお客様を施術せじゆつし終わり、二人目のお客様が来店するまでの間、ノートパソコンで予約リストをチェックしていると……

「あれ？」

二週間後の金曜日に、新規のWEB予約が一件入っていた。

名前は『青山蓮』さん。

青山蓮さんって、あの青山蓮さんだよね？

「本当に予約してくれたんだ」

嬉しい……！

予約してくれたメニューは、ハンドケアコースだった。ハンドローションを使って手をマッサージして、ファイルと呼ばれるやすりで爪の形と表面をキレイに整えるというコース内容だ。

メイクアップアーティストって、ネイルはしちゃダメなのかな？ それとも料金の都合だろうか？

結局痴漢ちかんから彼女を助けられなかったし、もともと、もしお店に来てくれたら無料で施術せじゆつしようと思っていた。

料金の都合で諦めたのなら、やってみないかと誘ってみよう。

以降私は、彼女がお店に来る日を楽しみにしながら仕事に励んだ。



そしてとうとう二週間後、青山さんの来店予定日がやってきた。

昨日ちょうどソロウエディングのフォトアルバムが我が家に届いて、素晴らしいヘアメイクに改めて感動したところなのだ。

この感動を青山さんに伝えたい！

青山さんが訪れる予定の十六時を楽しみに待っていると、予約の時間ちょうどに玄関ドアの開く音が聞こえた。

あ、来た！

マンションの入室をお店として使っているのが、玄関ドアの前に看板と、『ご予約のお客様は、そのままドアを開けてお入り下さい』という張り紙をしてある。

「いらつしやいませ……え？」

迎えに行ったところ、そこにいたのは青山さんじゃなくて、男性だった。

切れ長の目に高い鼻。顔のすべてのパーツが完璧な場所にあつて、芸能人みたいに整った顔立ち……しかも百八十センチはありそうな長身だ。

な、なぜかすつごいイケメンが来たー！

短く切りそろえられたダークブラウンの髪はワックスで無造作に散らされている。黒のテーラードジャケットの下にはボーダーのカットソー、そしてホワイトジーンズといった装いだ。首元にはレジメンタルストライプの模様が入ったシルバークラウドのネックレスをさげ、右手の親指にもシルバーの指輪を付けていて、とてもオシャレ。

そんな人が、どうしてうちの店に？

メンズネイルが密かなブームになっているとはいえ、うちの店には男性が来店したことはない。

あ、もしかして、迷ってしまったのだろうか。

同じマンション内には、整体のお店も入っている。そこ間違えたのかもしれない。しかし、オ

シャレイケメンはにつこり微笑んでこう告げたのだ。

「こんばんは、予約していた青山です」

第二章 キレイなお兄さんは好きですか？

へ？ 今、青山ですって言った……？

「十六時にご予約の青山蓮様……ですか？」

オシャレなイケメンはまたにつこりと微笑み、「はい、そうです」と答えた。偶然同じ名前だったらしい。

そっか、男性だからハンドケアメニューの予約だったんだ。

「え、えっと、お待ちしております。こちらにどうぞ」

施術を行う席へ案内し、私もテーブルを挟んで向かいの席に座る。

「本日施術を担当させていただきます村瀬です。どうぞよろしくお願いします」

「こちらこそよろしく」

最近男性でもハンドケアやネイルにこだわる人が増えてきていると聞くけれど、実際に自分が担当するのは初めてだ。

だ、男性かぁー緊張するなぁ……

「まずはこちらのカルテにお名前、ご住所、お電話番号のご記入をお願い致します。残りは差し支えないところまでご記入いただけますか？」

彼に手渡したカルテには、年齢と生年月日やネイルの経験はあるか、ある場合は今までどの店に行ったことがあるか、店からダイレクトメールを送ってもいいか等の質問が続いている。

それらの項目は、知りたいけれど強要はしたくないもので、うちのサロンでは「差し支えないところまでご記入下さい」というお願いの仕方をしている。

「お飲み物をご用意致しますね。こちらメニューになります」

「ありがとうございます。じゃあ、コーヒーで」

「かしこまりました」

飲み物を用意して席に戻ると、彼はちょうどカルテの記入を終えたところだった。

「書き終わりました」

たいていのお客様は最低限のところだけ記入するが、彼はすべての項目を埋めてくれている。

あれ、三十二歳なんだ。同じ歳ぐらいだと思ってたけど、若く見えるなあ……

「ありがとうございます。では、まず右手から始めますね。テーブルのクッションの上に置いていただけますか？」

彼は親指にしていた指輪を外し、右手をクッションに載せる。

そういえば、男の人の手を触るなんて初めて……いや、小学校の行事でダンスをしたときにあったかも？

でも大人の男性の手を触るのは、これが初めてだ。

ま、まずまず緊張してきた……って、いやいやいや、余計なこと考えている場合じゃない。

目の前にいるのは、〃お客様〃なのだ。貴重な時間やお金を使っ、うちに来てくれたのだから最高の時間を過ごしてもらわなくては……！

緊張よ、去れ！ 去れ！ 去れ！

「まずは爪の長さや形を整えるフアイリングから始めますね。どれくらいの長さがいいですか？」

「極力短いのがいいな。深爪気味かな？ ってぐらい」

「かしこまりました。では、形の希望はありますか？ ラウンド、スクエア、オーバル、ポイントと色々ありますけれど……」

爪の形を一つずつ説明していくと、彼はうんうんと頷いて聞いている。

「男性だと、自然なのがいいですかね。オーバルとかどうでしょう」

「うん、そうだね。自然なのがいいかな」

希望を聞いて、施術を始めていく。

女性の手と違って指がゴツゴツしていて、爪もほんの少し大きめだ。これは個人差があるのかもれないけれど、体温も高い。

う……どうしよう。

男性らしさを感じられて、また緊張が戻ってきてしまった。

人の手に触れていると、その人の気持ちが伝わってくるものだ。

緊張しているお客様の手はキシキシという音が聞こえそうなくらい硬くなっているし、常連のお客様の手はリラックスして下さっているのかふにやっと柔らかい。

……それはつまり私の状態もお客様に伝わっているということだ。

き、緊張が伝わっちゃう……！

私、すっかり！ プロなんだから、すっかりして！ そうだ！ 会話！ 会話もしないと！

普段は何気ない会話をしながら施術せじゆつをするのだけど、男性相手だとなにを話していいか途端にわからなくなる。

まずい。これは開業して以来最大のピンチだ。

「え、えっと、さっき書いていただいたアンケートでは、ネイルサロンは初めてとのことですよね。どうして今回はハンドケアをしようと思われたんですか？」

「あれ？」

彼はきょとんと目を丸くし、私の顔を見る。

「え？」

あ、あれ？ 私、なにも変なこと聞いてないよね？

施術せじゆつする手を止めて固まっていると、彼がクスクス笑い出す。

「あー……そっか。ふふ、見た目と口調が違うから、気付いてないのね。美乃里ちゃんがよかったら来てねって誘ってくれたんじゃない！ もうっ！ 忘れるなんて酷ひどいわ」

イケメンなお兄さんの低い声がいきなり高くなり、しかも女性的な口調になったものだから

ギョツとする。

え？ でも、この声……

「へ？ あ、青山さん？ 同姓同名の別人じゃなくて、本当にあの青山さん!？」

「ええ、そうよ。混乱させちゃってごめんなさいね。休日は肌を休めるためにノーメイクなのよ。いつもの姿で来ればよかったわね。口調もこの格好だと違和感あるかしら……と思って男っぽく変えてるんだけど、そのせいで余計にわからなかったみたいね」

ほ、本当に、あの青山さんなの……!？」

驚愕きょうがくのあまり、思わず立ち上がってしまう。

「え、ノーメイクってあの、え？ 青山さんって、おとっ……おとっ……男の人だったんですか!？」

「もしかして、気付いてなかった？」

嘘でしょ!？」

「き、気付くわけじゃないですかっ！ だって、あんなにキレイな女性、男性だとは思わないですっ!」

「あら、美乃里ちゃんみたいな可愛い子に褒ほめてもらえるなんて嬉しいわ。どうもありがとう」

「いやっ……そ、そんな……え？ あれ？ じゃあ、私、あんな恥ずかしい話を……お、男の人に……っ!？」

湯気ゆげが出てるんじゃないかってぐらい、顔が熱くなる。

あああああ……っ！ 穴があったら入りたい！ この場から逃げたい！

時間を巻き戻して、ソロウエディングをしたときの私にあんな話をすると言いたい！ なんて
途方もない願いを抱くものの、時すでに遅し……

「ふふ、まあまあ、座りなさいな」

とりあえず座ったものの、恥ずかしすぎて青山さんの顔を見ることができない。

ふたたび施術^{せじゆつ}を始めて乱れた気持ちを整えようとするけれど、顔の熱さすらもなかなか治まらな
かった。

「だからあのとき言ったでしょう？ 世の中そんな男ばかりじゃない。その歳まで恋愛経験がなく
ても引かないって。わたしが男だってわかったら、納得してくれたかしら？」

忘れてくれてたらいいなあって思ってたけど、しつかり覚えているようだ。

「わ、忘れて下さい……」

「うーん、ごめんね。わたし、割と記憶力はいいほうなのよ」

私がううう……とうめいていると、彼は「納得してくれた？」と再度聞いてくる。

「あ、の……この話やめませんか？」

「ダメ。美乃里ちゃんの今後に関わる大事な話だもの。もう一度言うわ。男はそんなことなんて
気にしないわよ。どう？ 恋愛する気になるかしら」

「うーん……」

想像してみるけれど、一度諦めた^{あきら}せいなのか、自分が恋愛している姿はまったく想像できない。

というか、先ほどの青山さんへの対応を思い返す限り、恋愛どころか男性と関われる気がしな
かった。

「その様子だと、前向きな答えではなさそうね？」

「そうですね。無理かも……私、今まで男性とほとんど接点を持ってこなかったので、男の人を前
にすると身構えちゃうみたいです。これじゃ恋愛どころか男友達すらできなさそうですもん」

「ああ、確かに。さっきわたしに気付いていなかったとき、身構えてたし、とっても緊張してたも
のね」

悟られないように振る舞っていたつもりだけど、やっぱり伝わっていたらしい。

うう、プロとして恥ずかしい……！

「んー……そうだわ。わたし、いいこと考えちゃった」

「え？」

その言葉に誘われるように顔を上げると、青山さんが意味深な笑みを浮かべていた。

「美乃里ちゃん、わたしと付き合いましょうよ」

「……………へ!？」

あまりに驚いて、爪の形を整えるためのファイルを手からポロツと落としてしまう。

あ、そっか、冗談だね。私ったら、なに本気にしてるんだらう。

「あはは……また、そんな、なにを言ってる……」

「あ、冗談だと思ってるみたいだけど、大真面目に言ってるのよ。痴漢^{ちかん}から助けてもらったお礼を